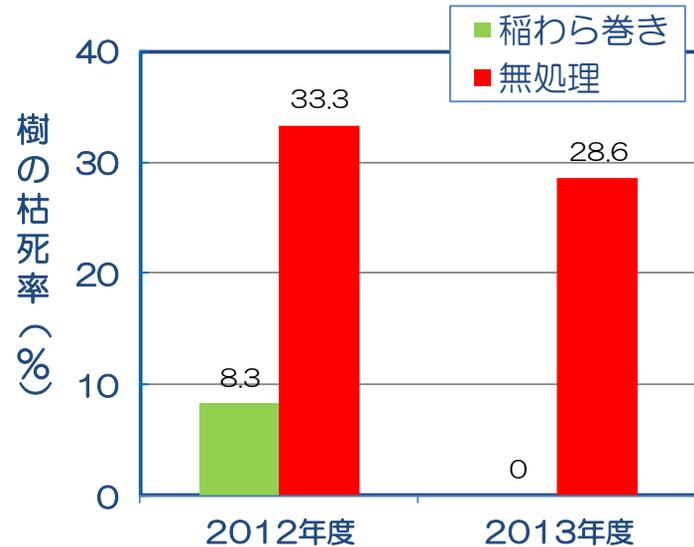


秋冬期の温暖化に伴って発生が懸念されるモモ若木の凍害を防ぐ対策



幹への稲わら巻き(実施例)



「清水白桃」若木での効果試験

開発のねらい

近年、秋冬期の温暖化による樹の充実不良に加え、春先の一時的な低温が原因と思われるモモ若木の衰弱や枯死が増加傾向にあります。このため、岡山県ではこれまで必要性が小さかった幹への稲わら巻きによる防寒対策が重要となっています。

新技術の概要

- 稲わらは、厚さが3~5cmで、地際から少なくとも50~60cmの高さまで、幹から分岐部も含めて巻きます。
- 稲わら巻きは、1月上旬~2月上旬にかけて行い、4月下旬~5月上旬に取り外します。
- 稲わらを巻くと、夜間は保温、日中は温度上昇が抑えられて樹体温度の日較差が小さくなり、凍害が発生しにくくなります。
- 4~5年生の若木に対して稲わら巻きを行った結果では、樹の枯死率が顕著に低くなりました。

活用場面

モモ若木の樹勢衰弱や枯死による農家の経済的な損失を未然に防止でき、生産意欲の向上や岡山県を代表する果物であるモモの安定供給につながります。